

金田一京助君著 アイヌ 敘事詩 ユーカラの研究に對する授賞審査要旨

從來アイヌ研究は言語學的方面に於て精到を缺けるの憾ありしが、本書の著者は、此缺陷を充たさんか爲に屢々アイヌ部落に出入起臥し、又アイヌ人を東京に招致撫育して、深く其民族性を觀察すると共に、廣くアイヌの言語を蒐集し、歌謠の異傳を筆録し、口碑の異聞を記載して、攻究を盡すこと二十餘年、其間幾多の論著を公にする所あり、遂に今回の大著を完成するに至れり。

抑も未開土民の口語口誦を確實に筆録するは容易の業にあらず、著者は刻苦克く此難業を果し且つ方言の採集、異傳の對校に努め、更に古今内外に於ける先進諸家の實査と編著とを檢討しつゝ自己の研究を遂行したり。

本書はユーカラの研究と題して二大冊より成り、アイヌの長篇敘事詩の採録と解釋とを中心とし、其性質價值來歴を闡明したるものにして、著者は更に韻文發生の經過を説明し、アイヌ語法の新研究とを加へて之に點睛せり。

第一冊はユーカラ(詞曲)の總説といふべく十章より成る。著者は緒論と結論との二章に於て一般韻文發生の經過を通觀して、アイヌ詞曲の重要性を論じ、ユーカラ(Yukar)が世界の口誦文學發達史上の一適例を供すべき所以と、日本書紀神代卷異傳等の由來を考究するにも、光明を投すべき點とを明

にしたるは、比較文學史並に古典成立史の上に裨益する所少からず。他の諸章はユーカラ及び同類の口誦詩篇の性質を論じ、アイヌ民族の生活と歌謠との間に密接なる交渉あるを説きたるものなり。第九章に於てユーカラの起原を闡明して、巫者の神憑りが詞曲の發生に關係多かりし徑路を觀察説明したるは着眼當を得たり。著者がユーカラ發見の歴史を回顧し、ユーカラ口誦傳承の現状を細敘して口誦文學現存の適例を示し、且つ自己のユーカラ探訪筆録の經過を示せるは、同種事項の研究者に參考の好資料を供し、其間、第五章に於て、著者は次に第二冊に取扱はんとする英雄詞曲虎杖丸の曲に就きて豫め解説を試み、以て其本文の序文ナキストとなせり。

第二冊は本書の眼目にして、『虎杖丸の曲』(Kutane Shika)と題するアイヌ敘事詩の本文と其邦譯を骨子とし、附するに精緻なる脚注を以てせるものなり、アイヌ語の原文は正確にローマ字を以て寫音し、其譯文は雅馴にして朗々誦すべし。著者は本文の前部に於て豫めユーカラ語法摘要を掲げ、以て譯文及び語釋と相參照して本篇を研究せんとする者に好指鍼を與へたり。此語法篇はユーカラの訓詁的方面に對して極めて重要なものみならず、又一箇獨立のアイヌ語法書として言語學的價值多くなるものあり。

抑もアイヌ語文典は、明治二十年英國人ジョン・バチエローの編纂せしものあり、尋で逐次の増訂を経て同編者アイヌ辭書と共に斯語學研究者に對し樞要缺くべからざるものなりしも、爾來四十有餘年

の間アイヌ語學の利用は單語誌を主とし、發音及び語法の上には新研究の見るに足るものなかりき。然るに著者が深くアイヌ語の言語精神を把握して、新に文典の大綱を組織したるは、其功績最も顯著にして、東洋言語學上の近業に於て特筆すべきものなり。個々特殊の言語現象に關して著者の見解の尙周到なる檢覈を要すべき點あるべきは當然とすべきも、今次の新文典が種々獨創の考案に富み、斯學界に寄與する所少からざるは之を認めざるを得ず。尙語法の研究に方りて著者は、アイヌ語の方言的差別、歴史的變遷、現在の言語活動、其他言語研究上重要な諸點につきて頗る周到なる注意を費せり。著者は此ユーカラ語法摘要に次ぎて虎杖丸詞曲の一傳韻文七〇三五句と別傳同八二二三句との原文及び譯文を毎句對照して語釋を註し、最後に各種の索引を附したり。語釋に際しては、語源上及び語史上の説明細心なるのみならず、其語釋語法兩方面に互りて下したる判斷は穩當にして、獨斷を避くるに力めたり。斯の如く著者の研究法は著實なるが、其謙抑なる態度の爲に、著者が比較研究に資したる東西古今異民族の言語文學の範圍と材料が稍狹隘に失したるの憾なき能はず。

之を總括するに、著者が本書に於て擧げたる業績はアイヌ語學文學の上に前人未發の新野を開拓し、且つ比較文學史並に比較言語學の上に多大なる貢獻をなしたる外に、延いて日本の古典舊辭の發達と中世期童話類の起原との史的研究にも光明を興ふるものあり、何れも學術上の功績少からざるを見る。